NO. 202　11月号

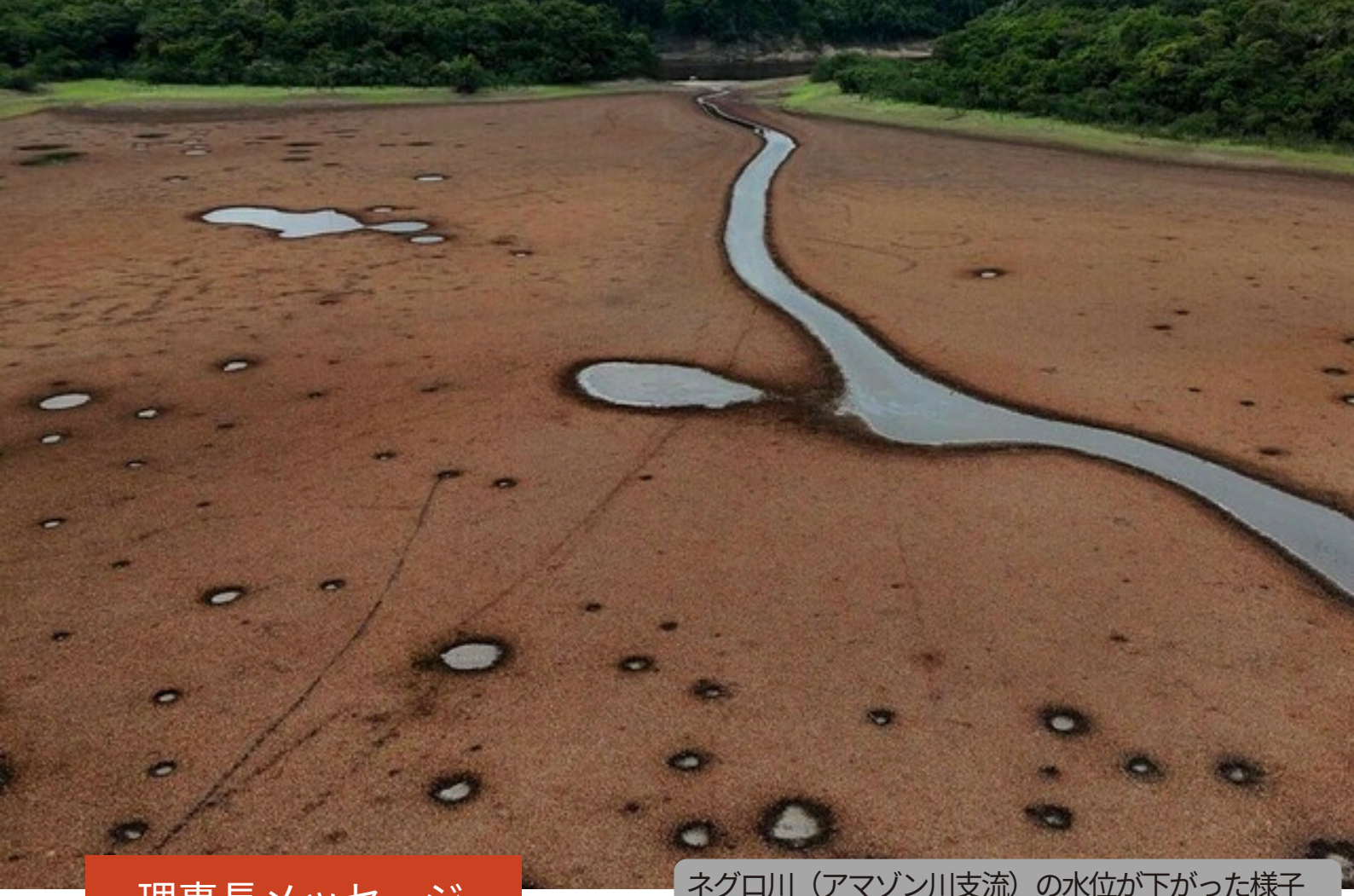
FOREST NEWS

未来を守る木を植える
未来を育てる木を植える

2024年度　指標

①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
②国内において累計５００本の植樹活動
③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
④セミナーを通じて植樹活動の啓発
⑤他団体との連携

NPO法人　地球の緑を守る会　　発行人　高津啓洋
〒121-0072東京都足立区保塚町１－６　Tel:03-6783-4707　Fax:03-6783-5595
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ http://midori.mond.jp/



ネグロ川（アマゾン川支流）の水位が下がった様子

理事長メッセージ

”森が枯れ、農業がすたれ、やがて人類が滅亡した”とならないために！

日本の18倍の面積をもつアマゾン熱帯雨林は、「地球の肺」としての機能を果たし、医薬品や食品に有用な未知の遺伝資源が充満した生物多様性の宝庫として知られています。

ところが近年、中国、ヨーロッパ向けの食肉用牛の放牧場や大規模な大豆畑、また石油の代替燃料であるサトウキビ畑への転用などが急速に進み、30年後には森林面積が半減するといわれています。

こうした危機に対処するため、1992年、アマゾン河口の都市ベレンにあるブラジル永大（日系の合板製造会社）の工場敷地内で、宮脇メソッドによる最初の植樹が行われ、現地の潜在自然植生であるビローラ、バルサ、スマウマなど80種類のポット苗9万本が2.4haに混植・密植されました。このプロジェクトはその後も三菱商事の協力を得て継続して行われています。

10月9日のNHKニュースで、アマゾン河の渇水と水温の急上昇、それによるアマゾンカワイルカ（絶滅危惧種）への被害が報道されました。かりに“地球の森の親分”であるアマゾンが崩壊するようなことになれば、地表面の平均気温が上昇し、“森の子分”つまり地球上のほとんどの森がその連鎖で壊滅的な打撃を受けることは間違いないでしょう。

当法人として、流域の中心部マナウス市付近に拠点を置くなどして、アマゾンの森の崩壊をストップさせる活動を始めなければならないことを痛感させられました。

パンタナール・レダ現地　第一植樹園の現状と改善策

第一植樹園の様子（2024年10月現在）

第一植樹園は、洪水による侵食により60%近くの樹木が発育不足、及び枯れている状況です。この現状を踏まえ、植樹園の立て直しを計画しています。

①樹木の選定を見直し、潜在自然植生へ
②植樹方法を混植密植による宮脇式へ
③植樹場所を堤防付近へ移動し堤防強化

これらの改善策を25年より実施する方向になります。レダ現地での実績をもとにアマゾンの植樹活動にむけてのステップにしていき、将来的な環境保全に繋げていきます。

堤防強化のための植樹場所検討箇所

今月のトピック

山形県酒田市土砂災害現地を視察してきました

2024年11月2日から4日まで、山形県酒田市を訪れ、土砂災害の現場を視察しました。日本の森林の約40%が単層林や商業林で、これらが最近多く発生している土砂災害と関係していると言われています。実際の現場を見て、その関係を確認し、土砂災害防止のために植樹活動の可能性を調査する目的で訪問する運びになりました。

酒田市土砂災害

土砂災害現場視察の1日目は酒田市を訪れている被災地ボランティアメンバーと一緒に土砂災害の現場を手伝いました。訪れたお宅は裏山が崩れて土砂が流れ込み、ボランティアはその土砂を掻き出す作業をしました。

このお宅の裏山は杉中心の単層林でした。100年以上続く家系で、以前は山の手入れをしていたそうですが、現在は高齢の夫婦のみが在住のため、手入れができない状況でした。雨水を流すために水路を整備していましたが、これが土砂が流れ込んだ原因の一つになっていると思われます。

裏山の杉林

土砂が流れた水路

2日目は、特に被害がひどい酒田市北青沢地区の現場を訪問しました。北青沢地区は山の土砂が整備された水路に沿って流れ、多くの家が全壊し、死傷者も出ました。

異常気象による記録的な大雨もさることながら、土砂災害を起こした山が単層林であることや、山から流れる水路が石とコンクリートで舗装されていることが土砂災害の一因になっていると思われます。

生態系全体のバランスで重要なポイントは空気と水の流れと言われます。特に見えない土中環境の空気と水の流れがどのようになっているのかが生態系を育む上で重要になってきます。

本物の森は、人間の生命を守ってくれる最高のパートナーです。災害を通じて本来のあり方を見つめ直すきっかけにしていきたいです。